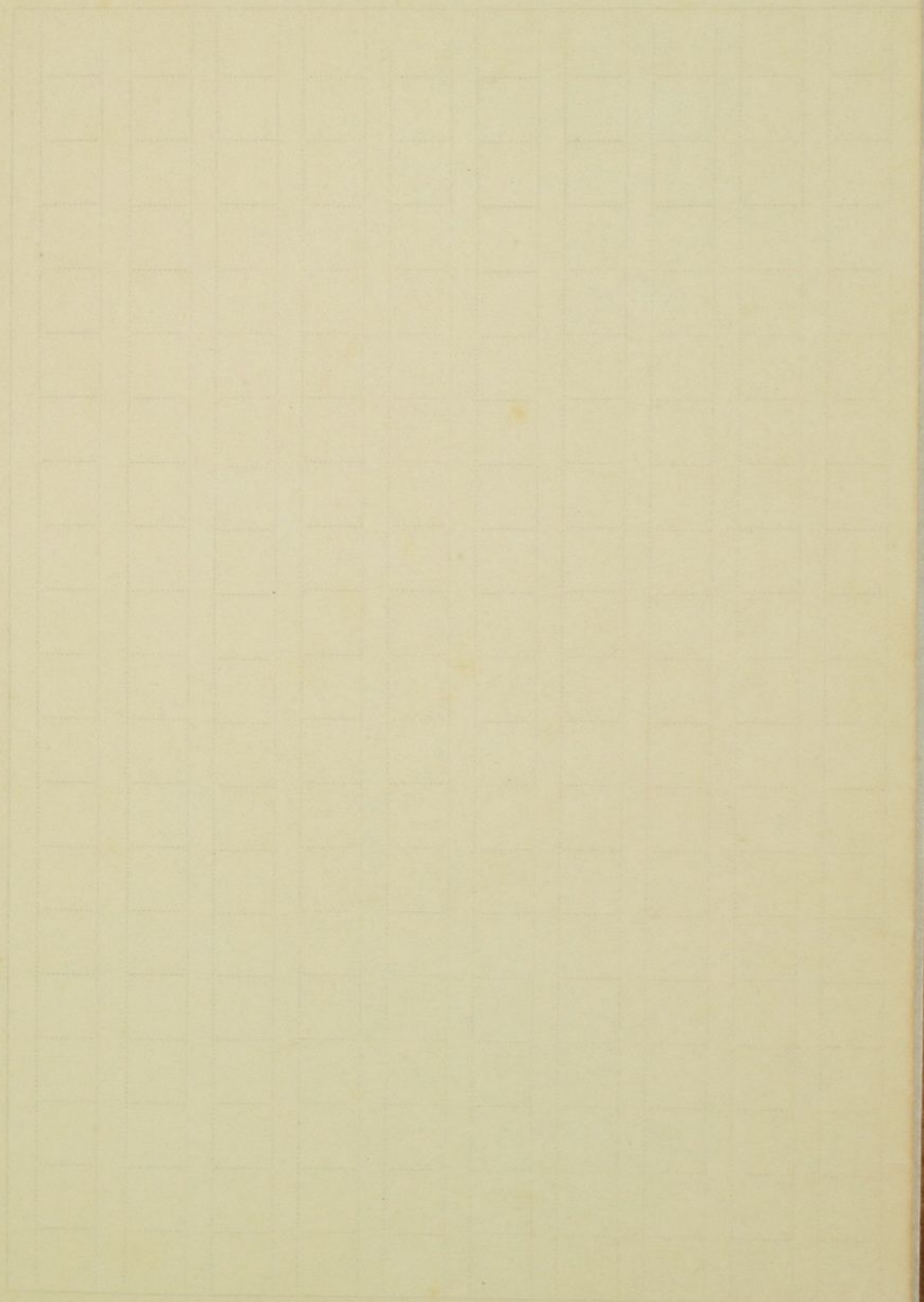
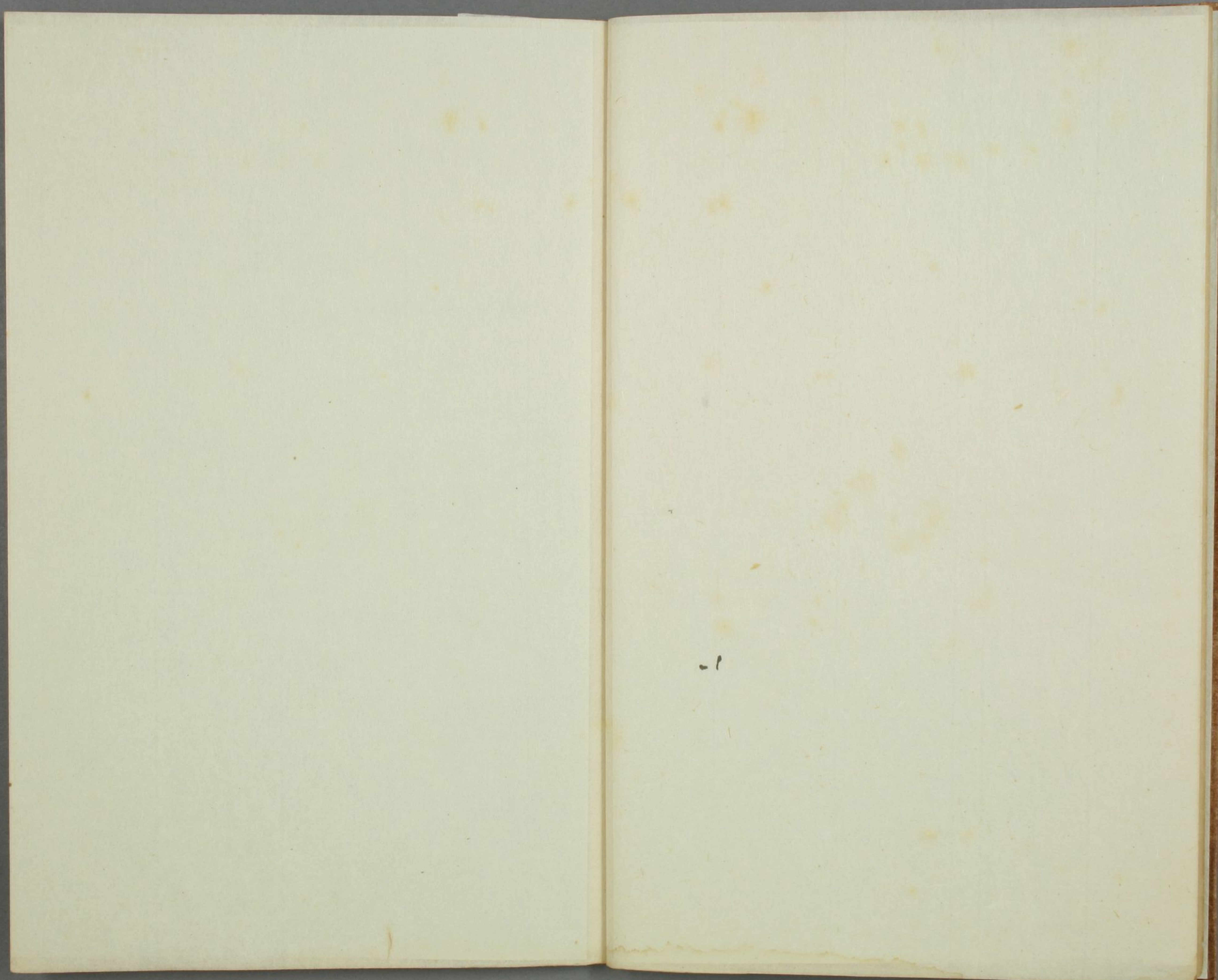


中村俊定文庫
文庫 18
178



貞佐紀行





-1



其翌

入	鼻	我	あ	手	関	野	耳	着
息	を	負	り	前	九	屋	へ	た
の	わ	ハ	く	酢	月	敷	よ	日
帯	た	比	な	の	の	ハ	り	に
子	た	丘	さ	た	影	土	そ	爰
ハ	ん	尼	る	く	を	物	ふ	も
強	て	に	な	ゝ	証	店	口	も
ぬ	鼻	門	新	て	る	の	も	紫
花	を	を	緒	船	証	研	紫	陽
あ	探	通	の	を	る	一	陽	花
や	る	ら	息	秋	る	て	花	契
め	ハ	、		寒				
				ま				
北	北		佐		北		貞	潭
	北						佐	北



古一へ人乃行脚も
 なれぬさあ 志は方
 あらうあきうを旅了
 蛙を企川を馬八明ら
 脊はさよも何はす流凡
 を立始よに吹きて

と能る乃

い葉り包むの歌

貞作

櫻花実

比川尻に家鴨とほつく

佐

も、^{百積}さかの村淋しくも京紺屋

そち次第とり異夢にて建

北

四五貫目つく旗本の玉かつら

席の奥なる土ハ踏と

佐

蓋のない箱の蓋をと夏の月

柱に蛸のかゝりりたるそや

北

飛退て花のあらしの怪氣松

厚肥たしか馬やふいり

佐

百ヶ島薬に太刀をぬかうその

(大東京文具子エーシオン特製)

芝御門出来盤あるかこと

北

鈴にゆく道に結納の鐘の声

つめり給へは茶を捨てる

小

松葉かく奴十日に潤れ

佐

ちかき暮雪に旅にモリせう

北

問達の願をとく封し物

新訟しうけハ文竟になれ

佐

わか井のてつへんさして雨蛙

北

四隅の箱荷楚歌の養ひ

佐

此恋ハ腕を強くし月に更

小

毛煙の毛のぬける 鶏頭

佐

朝顔ハ盛久し支念佛屋

北

鏡つかひ腰押に似た

佐

泥亀ハ泣て其夜のあたゝかさ

佐

武彦を花に子を抱くハ鈍

小

小刀はさゝかへらぬ油かき

小
し
四
ウ

ひたおもあきも雲の夕照

佐

燿月子の縁ありて佐野、

宿りもせハしからす折しも

市姫をみかほ崎山卯木泉

貞佐

(大東京文具チエーン特製)

佐野

是非獅子を誘ふて見はや雲の夜

沾楓

雪のニのかた水鶏戸に未て

貞佐

御機嫌の青磁あつめハ山更に

岱真

鞆男て木このほころひ

泉支
五才

月夕船の腹から罌買ひ

露因

仙家の傘にまよひとんほう

松推

師の留守を薄の反古のくらへニし

潭北

つ了く釣瓶しろい手に糠

執筆

ひよつと出に文珠も惚るたはこ入

其道

は	誰	玄	さ	蒲	鳥	平	氣	山	衣
つ	と	関	、	原	に	城	に	彦	を
か	は	迄	ら	ハ	行	の	片	の	か
し	ら	猿	を	跡	あ	計	系	蒼	く
さ	ん	の	さ	へ	ふ	あ	の	す	る
存	て	三	つ	引	神	り	桐	る	樽
し	鬼	味	と	込	の	ま	の	ま	の
長	茨	線	こ	さ	と	し	花	て	大
柄	の	昼	き	、	、	の	ち	鏡	も
の	茨	に	上	水	ろ	長	る	立	め
水		過	る	石	き	柄			
の			蛸			抄			
月									
真	周	佐	真	推	道	楓	支	真	佐
							六才		

ナ	復	学	校	月	と	ま	さ	草	右
我	は	の	ふ	や	ろ	な	か	槌	有
な	は	後	い	海	／＼	板	さ	槌	酒
り	や	や	さ	愈	と	に	に	ハ	の
ぬ	と	し	く	愈	燈	一	旅	雨	あ
馬	な	ろ	踊	よ	る	雲	を	後	く
刀	り	の	存	る	も	通	駿	の	か
の	知	鎖	ん	の	の	了	河	田	ひ
汐	佐	の	め	か	四	鷺	か	暮	山
道	に	郡	り	口	日	の	う	を	棒
兩	御	ほ		リ	盆	風	わ	ふ	
合	暇	く		過			せ	ふ	
羽		水						の	
								か	
周	推	道	北	支	真	推	楓	佐	周
						五才			

(大東京文具チエーン特製)

庵地きハマリ角カ一晚

ハツ續けあたり吸物からころも

我は岡湯の山はたちなる

よしやを水霞のなふ了片麻

さかなを見こハ死たくもなし

花さかり夜かハゆか了妙履取

背中ゆかしくよふこ鳥かな

陰陰 結城我尚子の亭に臨て

道道 あれはとくと花柚の中やとり

をあすひし麦穂娘しき

楓

支

道

周

佐

北

推

貞佐

我高

ちよんと切足せる大空玉子にて

潭北七才

結城の地ハいに一七郎朝光の

領に二繁葉花とあらハ

一毛今高杉村(あり)に芝を踏す 今高杉村(あり)に芝を踏す

貞佐

時に興して

我高

比ハ扇立よる人を柱かふ

玉をわすれぬ蓮のねふり葉

杣出しのつよき姿を鍵の手に

雨ハきこえす箸洗ふこ

月影の帯はゆるま了腰瓦

貞佐

潭北

昔我

周牛

そ の か た き と 念 者 や つ れ る	さ ゝ 波 や 観 音 揚 尾 お ほ ろ 月	馬 の む せ た る 柳 十 本	花 守 の ふ し き な る 哉 座 頭 坊	相 刺 を し て 瓦 千 あ か る	御 幣 を 晦 日 く に 押 な か し	大 長 刀 を 情 ^精 出 し て 研	鎌 倉 の 古 い 千 柄 ハ 櫛 杵	ま た 小 寒 の 笛 あ は れ 也	鰻 頭 の 注 ^注 連 ^連 の 余 慶 を 祈 る こ と
佐	高	晋	北	尚	佐	小	晋	佐	尚

娘 の み や け 西 へ 入 町	体 に す り 佳 名 限 さ は 葛 の う ら	鰻 な る う ん 波 の 逃 足	小 紋 か ら 藍 か ゝ る か 十 三 夜	碑 を き り 付 る 凡 と 見 た れ ハ	う ら な く も 喰 ふ 度 こ の 傘 立 て	刷 毛 あ つ か ひ を 我 に 沃 写	は つ 蟬 や 川 の あ か り の 銅 盤	即 興	鶏 頭 を ま た せ ゝ る 鶏 歌
晋	北	高	佐	潭 北	我 尚	貞 佐	晋 我		執 筆

大東原文具子エーン特製

+

粉^ナ唄の鼻をなうへる捲^ハ水

似の盛に廓治かたよる

年月を引込所の寺林

行雪隠の神のともし火

時として百両ちうす玉くし筥

降れは靨面うつとしき紋

むく起の羽丹生キサイ私市ハ稻の花

おにの志ニ廿鐘道半兵志

びさうなき布施の千傳庭の月

五艘てひらく新艘の樽

晋

尚

佐

北

尚

晋

小

佐

晋

尚

(大東京文具子エーの特製)

ウ

向歯のぬけかゝるのに子ハそゝる

塗炭トタンに来てハ品定つく

鳩迎ふ城の日影の飯時分

八寸角の折れらいらたか

新荷次く松明振に春の雪

花の四郡ハ北へ流るゝ

いとゆふの長押に倦は肩の猿

ひとつに寄て鮎の腸とる

予か一字を得させよと

のをまるゝいなミかたさよ

佐

北

尚

晋

小

佐

晋

北

レ九ウ

ナ
されども人の帯をうぢつく

撫泉

梅干に帛の一重も神慮

柏舟

棧敷一硯奪て来る

長吟

押灸を鳥丸よりもやめよとせ

周午

然と父顔を作る瓢箪

棟宇

穀十程ささいとつかれ袖の丹

佐立

沙奥にも恥てうろ籠りぬる

丁稚

つう杖を机のうへの藝荷擔

遊佐

七ツの年の杉長くなる

手吹

神奈川の穴に鳥居の穴かゝこ

亀石

ウ
鮎のちからに禪をいぬ

杏坡

竹馬の畳のうへの雪のこゑ

青栲

園揚杖よて短氣しつまる

柏舟

たくひなす入木とハハは腮を撫

丁稚

雲起る日ハ椅子に膳ひ

周午

餘花にまた但品壹分舟便

潭北

袷いくつにあたりくらへん

猿栗

男体山

夏帯や志や人と男筑波山かつら

貞佐

女体峯

如月の香にそあはれは膾の子	花と聞しは役者身と責	高汐は播戸木綿の透通	ふち矢を射たる顔はもれも	四下りて地獄の合ぬ事おしそ	もてあそびしに哥を大会	いさこされ行徳漬の片下	産おとさたる短衣の月	ほとりきすをさ手拭の道心者	内とゆかき馬工郎の幕
帛睡	雀舟	周雲	雨竹	貞佐	單志	其風	更出	潭北	帛睡

見釣す胸は年の仕廻方	千成の槻門に逗留	献ひとつ過さは命へぶつ付る	よし聖の玉て祈りとこたふ	石川の杭はうなつく夕けはひ	二本さしたる帷子の糊	覺悟あき雨に塩毒つまつかせ	看板きせしによつと犬菊	春日花けふ紅葉の帯に貝	月も森うれぬ西の四宝
更出	其風	單志	貞佐	雀舟	周雲	雨竹	更出	潭北	虚舟

大東京文具社エーエー特製

星と見え星をいたく裂膺

秋

神の大工のひろい眉間

株

捨た子の名乗あふたる今年廿

推

関の人々癖ぬゝ朝飯

批

態膽またふりかされて念珠を切

佐

箱す事に老をやしなふ

仙

蒼海の息をつく時たひら雑奥

空

あう打しまふ暮の相手

吟

鬼ハ立花よセツ見に糸考れ

之

往者の誠の強揃ふ離

瓶筆

（大東京文具チエーン特製）

日光ハおめでし梅すツきの
具山幸ひ鹿沼よりその道
七里と間より

水無月の空にすめく
に巾

負佐

中禪寺の湖水ハ六月朔日より

市堅安子鹿沼禪頂とくや舳

うらみか瀧にて

裏禪のほころひ行や深山百合

又サ聖よかへりて
涌釜泉糸天よて

希見會

植て行田を己刻の樽茶哉

貞佐

一里ハ新樹ニ里通り雨

葛草登

木に遠く扇の籬のかさし物

泉支

夏といふ川も七里の野飼哉

五株

一刷毛の草の矢並や夏けしき

錦夕

阿蘇泥

鶯の子のあそびくりや燧音

潭北

此泥の雪踏の跡や蟬の声

貞來

刺水といふ声や真菰の片鴉

尊蒼

忘れといふ井戸と汲らんところこん

活楓

佐野舟橋

問水こハ橋を穂麦のよしも哉

甚口

橋の名の名主に流水蚊ハ柱

貞佐

伊吹山 兼 標茅の系

人も同じ山も同じく葎取

山丈

夏山や跡をしめちがはう鹿

潭北

遊行柳

茶筥獅子まゝくふり後柳

潭北

夢の穂や志ひるゝ足を柳陰

船雪

殺生石

一ツ家の身より光るや夏の月

百詩

厄介の石なるひとつと不虫

貞佐

石に誰後髪ひくかんに鳥

浦原柳露

夏ふしの人よかほるや石の風

雪介

土佐野

釜鑄物新

花如小角豆とよや隣のたゝら訊

甚道

卯花北つとる類ひか鑛土

音我

風薫る里の脊中や薪尺

左人

烁ちかし佐の薪下す天の河

市睦

涼しさの棚橋鍋や古天明

佐野貞支

蟬の羽の一重壁あり鍋踏鞆

月野風

膚をくきらに小嶋作左東門

潭北

(大東京文具子エーニ特題)

注文の鐘ものここめおゆるの花

貞佐

那須翁並たえこ

見にこされおかた文七夏ころも

其風

櫃村と名にこそ夏のへたて牝

鳥山魚尺

那須殿の遠的場有花たはこ

佐久山李郷

宇都宮縮團扇

留守つかふ人かならず團が存

貞佐

舞殿子舞ふ事いなし宮團

比竹

生縮ハ茶を知ら世哉思ひかり

下館白蹄

組衆の子ハ小綿己宮宇ちあ

杜仙

五休名所一筆

をとリ腹明てくやしき宮縮

おれで書繪子古来あり宮團

度沼晒 並葱麻

櫛の齒子；ちてや水の出来晒

撫泉

上世四ウ

年ふたつ人こそ白根葱の茎

佐立

水直水によい子游やさらし麻

長吟

日光の水をまくなり晒杵

紫羊

音も音も宮様道やさくら麻

楚桃

大谷石

大鑿や今のハ研苔の花

我高

大東京文具チニオン特製

枝を借せ 嵩ハ五月の石束羽

貞字

水鶏水にハはハつすや石の泊小屋

松吟

上世五才

真園木綿

寺深しさらしハの岡のを利木綿

杏坡

寸馬見よ真園一里の晒川

潭北

久下田茶

真おきの跡や新樹の雲の脚

周午

ニ番茶のくけたと斗お綻ひ

周雲

茶むしろや十町結城續く日の匂ひ

如柙

妹か赤見の市会入梅う水ニ番摘

梅戸

踏^カて今茶^カの舞^カ臺^カあり大園^カ
志^カ町^カ

日光塗物并素麩川海苔

たよふや鳩の巣海苔の道者舟^カ 虚舟

素麩のいとまも寒し夏^カころも^カ 下^カ雅

室^カな^カる^カや別所素麩單^カもの^カ 雨^カ江

赤柳の暑雲うるさし女刷毛^カ 里^カ堂

山^カ出^カの^カ木^カ地^カに^カく^カも^カる^カや郭公^カ 猿^カ栗

足尾山銅^カ 専^カ之^カ

山の垢金の乳房や花さくろ^カ 負^カ九^カ

銅^カふ^カく^カや山の足尾のゆりの花^カ 世^カ古^カオ

(大東京文具チエーン特製)

皆川産

蘭^カ中^カ川^カの^カ襟^カかく^カは^カや大^カ中^カ寺^カ 立^カ推

夕顔や蘭^カ歳の^カ音^カの^カは^カい^カり^カ口^カ 午^カ吹

鋳山薬蕨

こんにやくの夏水かへよさ、水石^カ遊^カ佐

こんにやくや玉の夏陰そこ^カと^カし^カも^カ 拍^カ舟

药蕨の一過ハ涼し飛鳥川^カ 貞^カ竹

百村山雜器

覆^カ盆^カ子^カ敷^カ卧^カ猪^カの^カ側^カの^カ山^カ細^カ工^カ 雨^カ舟

夕立に或ハ乗つ、雜器挽^カ 青^カ梧

レ世古オ

絹川鮎

滞りの、河原くろひやのほり鮎

上州中

百枝

闇の夜も鵜舟ハルため光かな

結城

露石

一夏を野筋の巻くにあそんで

又ミチのくの巻くニそしやかく

おもひ立ちより我旅も煉にうつりて

境の明神に着ぬ

同塵の駒引わけよ垣ふくべ

貞佐

とやかかくは月十五日岩城山に至て

露沾公へ即興の句を呈上す

(大東文芸子エーシヤ)

帆歩行や遠くて月の御膝もと

今

七七

山並のおたやかなるを望て

矩模と知水岩城山陰葉山子主

貞佐

神まは呈してはたちの葉師堂子

ぬかつく

蕎麦咲や波立寺の月ほかまち物

今

小名湊

秋小名の湊道鱧鱧鱧ミチ

今

露沾公御會教く一軸を

とれは軽くにとくハ又重し

春納ツて山ハもチ論
 中庸の不変をわたる勢田の花
 立圃
 執筆
 岩城の名残も名こそこの閑子
 かりり首途を之築子浴して
 常陸へあもあく
 手拭を御湯子絞るや大糸瓜
 貞佐
 蛭の口も瀬子踏め閑紅葉
 全

及行かへる寺を伯父なる旅大工
 沾梅
 及ほぬ口へあてるほら貝
 行かへる寺を伯父なる旅大工
 沾薄
 簾相もせよ狐昼中
 嵐文
 椿も反る潮お川の乾きかね
 露鶴
 川おをそのまゝ繪子書れたり
 右巴
 うつきりと射礼の族月暮て
 芳津
 八百日落つく桐のかさね葉
 貞佐
 幾袂を友鳥なれて野田の杭
 露沾
 略さハ中子も玉川の御句を
 もつて一順の之夏にあはす

（大東京文具チエーン特選）

共一代集よハカ葉と外也
 今母集ハ三津乃乃と際く甚
 源乃き〜き〜とありい
 子魚子の水あのかと
 志つとも甚多衡より
 流布粉片〜〜と
 佐

平の露河清く露の如く
とたよるるの一人の心
ひろれよむつじの心
とよくをむとよくと

倍池亭
伊勢

